

「日吉キャンパスタウンミーティング」

慶應義塾大学日吉キャンパスにおける社会貢献・地域連携活動の課題

タウンミーティングを開催して

商学部助教授 牛島利明

日吉キャンパスでは、学生・教職員有志によって、いくつかの組織的な社会貢献・地域連携の取り組みが行われています。しかし、いずれの活動も発展途上にあり、塾内の企画運営者・参加者、地域の人々双方が十分満足するだけの効果をあげているとは必ずしもいえません。今回のミーティングは、このような現状を受けて、日吉地域でさまざまな活動を展開している住民の方々と学生・教職員が意見交換を行い、今後の活動の方向性を探るために開催したものです。

当日は、教養研究センターの「新しい教養授業の支援」事業に採択されている「ヒヨシエイジ」と「ボランティア学ってなに！」の活動報告の後、参加者全員が6～8名程度のグループに分かれて自由な意見交換を行いました。

大学における社会貢献・地域連携活動は、大学の知的・物的な資源を社会・地域に還元する活動であると同時に、学外の様々な人々と学生・教職員がお互いの知識・経験や価値観をぶつけ合い、新しい成果を生み出していく場であるべきでしょう。とすれば、ともに学生が主役となって社会・地域に働きかけ、新しい経験を通じて自らの成長をはかることを目的の一つとした「ヒヨシエイジ」や「ボランティア学ってなに！」のような活動が持つ重要性はあらためて指摘するまでもありません。

「ヒヨシエイジ」にせよ、「ボランティア学ってなに！」にせよ、今後も学生を始めとする若い世代が自由に力を発揮できる場であり続けることが重要ですが、大学と地域が彼らをどのようにバックアップし、大きな流れを作り出していくことができるか、キャンパスを含めた日吉の街の未来はそこにかかっているように思います。また、慶應義塾全体にとっても、大学と地域社会の信頼関係をどのように構築していくか、これらの活動の成果を教育・研究活動にいかにフィードバックしていくかが問われることになるはずです。

ミーティングには教職員と地域住民の方々、あわせて約50名が参加され、終了予定時間を過ぎても各グループで議論が続く盛会となりました。今後、それぞれの活動の中で学生と地域の方々との交流が深まれば、お互いの立場や思いの違いも鮮明になり、目指すべき方向がより深く議論されることになるでしょう。今回のタウンミーティングが参加者各位の交流を深めるきっかけとなり、また大学における社会貢献・地域連携活動のあり方を考えるための一助となれば幸いです。最後に、お忙しい中ご参加を賜りました学内外の皆様に御礼申し上げます。

PART I. 活動報告

① ヒヨシエイジ 2006 佐藤なつき

(ヒヨシエイジ 2006 実行委員会代表)

私とヒヨシエイジとの出会いは、私が入学してすぐに、当時履修していた授業で話を聞いたときです。そのときは、大変そうというイメージが強く、それほど興味を持ちませんでした。しかし、AGEFESTA2005のお手伝いで、当日の観客にアンケートしたときに、地域住民との話がどんどん話が弾み、それがとても楽しいと思いました。こんな風に、普段の学校生活では話せない人と話せる機会があれば楽しいだろう、という思いから、ヒヨシエイジ2006に関わることになりました。

ヒヨシエイジとは、地域住民と学生による、10年スパンの地域活性化プロジェクトです。違う世代の人との接点によって、新しい可能性が生まれ、街がにぎやかになることを目指しています。そして、その手段としてイベントを企画し、運営しています。

今年度は、イベント当日だけではなく、準備の段階から、異世代間の接点を増やしていくと考え、「巻き込む」というコンセプトを掲げました。このコンセプトを象徴的に表していたのが「HIYOSHI Art MiXTURE」です。音楽、

ダンス、ファッションショーをテーマとして、地域住民と学生のコラボレーションによるステージを展開しました。普段は接点がない地域住民と大学生が、一つの目標に向かって練習を重ねたことによって、今までにはないような、とても温かいステージとなりました。このような試みは初めてでしたが、出演者の方々からは、「今まで接点がなかった小学生と一緒にできてよかった」、「子供たちは初めての晴れ舞台で楽しそうでした」「このような活動を続けてほしい」「来年もぜひ出演したい」といった感想をいただきました。さらに、来年以降にむけて、出演者のみなさんが感じた問題点と改善点を聞くこともできました。

他にも、小学校での感情アートのワークショップや、ヒヨシエイジと商学部の総合教育セミナー「21世紀の商店街」が協力して「日吉活性化クーポンピヨ」(「横浜型環境ポイント」実験)の運営を行うなど、全部で12の企画を運営しました。私たちはこのように様々なイベントを通じて、地域と学生の接点を築いてきました。しかし同時に、様々な問題点に直面することとなりました。代表という立場から一番強く感じたのは、ヒヨシエイジという



開かれゆくキャンパス6「日吉キャンパスマーケティング」

存在の曖昧さです。現在ヒヨシエイジは、町内会、商店街、地域住民、大学教員、学生で構成された協議会を設置し、この組織がイベントの承認を行い、主催しています。そして、主に学生がイベントの企画と運営を行っています。

しかし、私がいろいろなところでヒヨシエイジのことを紹介しようとしても、この複雑な組織体制をうまく説明することができませんでした。学生代表の私は慶應の学生であるけれど、ヒヨシエイジは大学の組織ではない。慶應の名前をどのように出していいか分からず。それがすごく不安だったし、悔しさを感じたりもしました。私自身が、自らの所属する組織をきちんと説明できないという矛盾に直面したと同時に、協力を仰ぐときに地域住民にもうまく話せず、理解してもらうことが難しい場面もありました。

今後は、参加する住民がますます増えると同時に、企業や行政など、より多様な主体とのコラボレーションが予想されます。そのようななかでは、学生がみずからの組織に自信を持って説明できるようあってほしいと思います。そのほうが、学生もヒヨシエイジへの愛着やモチベーションが持てますし、様々な方々の理解や協力を得ることもできるのではないかでしょうか。

来年度以降もヒヨシエイジは、「巻き込む」というコンセプトを念頭において、地域住民と学生の接点を増やしていくかと考えています。イベントは、異世代間の結束を高めることができるし、住民も学生も楽しめるものです。そこで、今後もイベントを通じた地域交流という新しい切り口で、ヒヨシエイジを発展させていきたいと考えています。しかし、これまでのよう、学生が一方的に考えた企画を協議会の場で承認してもらうだけでは、地域の人の協力も得にくい部分がありますし、住民と学生の接点も限られてきます。実際地域の人たちには、「協力したくても、どこでどのように協力すればいいか分からない」と言われることもありました。そこで、イベントの企画段階から地域住民を巻き込み、声を聞き、一緒に作って行けたらと考えています。これもまた困難がともなうでしょうが、ヒヨシエイジの今後の発展を考えると、やるべきことだと思います。

ヒヨシエイジは、これまでの4年間の活動を経て、知名度が向上し、地域住民をはじめ、行政、企業といったように、たくさん人がヒヨシエイジに力を貸してくれるようになりました。このような環境で、私は本当にたくさんの人と出会い、たくさんの人のやさしい声に励まれ、たくさん的人に助けられながら、この活動を続けてきました。確かに、それなりの苦労があったと思います。しかし今の私は、このヒヨシエイジの活動を通じて、自

分がどれだけ人に助けられているのかということを、身をもって知ることができましたし、イベントの成功を祈って、本当にいろいろな世代の人が力を合わせ、そしてイベントが成功した瞬間の、鳥肌が立つような感動が忘れられません。その感動や感謝の思いのほうが大きくて、今となってはそんな苦労はありません。このようなヒヨシエイジの魅力を学生にもっと伝えていくことで、ヒヨシエイジを経験する学生が増えていくことを願っています。

今、ヒヨシエイジを取り巻く環境は、大きく変わっています。このような変化のなかで、自分たちが何をしたいのかをもう一度よく確認して、いろいろな人とのネットワークを築きながら、この活動を継続・発展させていきたいと思っています。

(ヒヨシエイジ web サイト <http://www.hiyoshiage.com/>)

②ボランティア学ってなに！ 篠塚憲一

(ボランティア学ってなに！代表)

「ボランティア学ってなに！」は、課外教育の一環として、社会におけるボランティアの意義・必要性を学び、実践すること。またボランティアを通し、コミュニケーション能力など、社会で生きていくための基礎体力を身につける、すなわち、塾生が義塾で学んだ高度な教養・専門知識を社会で発揮するための力を養成することを目的としています。

「ボランティア学ってなに！」では、興味のある塾生にボランティア情報や団体の紹介、意識啓蒙のためのイベント企画、ボランティアに関する講座や報告会などを実行しています。講座では、塾生がボランティア活動に際しての基礎知識や心構えを学び、またノートテイク（聴覚障がい学生が講義に臨む際に、内容を要約しながら筆記する通訳方法）の知識や技術を取得できる機会の場を提供しています。その他にも、車椅子や白杖などをを使った疑似体験や、実習・施設見学、塾生が各種ボランティアに参加するための説明会なども開催しています。

2006年度の実施例

・「NPO法人 RDA 横浜」 障がいを持つ人たちにも健常者と同じように乗馬や馬車操作を楽しむことを提供し、健康や暮らしの質の向上を図ることを目的として、障がい者の社会参加、あるいはレクリエーションの一つとしてとらえられている。RDA 横浜は、1997年にRDA 英国本部より活動が認められ、横浜に根付いた地域活動をしています。RDA 横浜との共催によるボランティア説明会を開催し、現在、塾生3名がボランティアとして活躍中です。

・「国際ボランティアプロジェクト」 ボランティアワークは多岐にわたり、環境保護、建設、修復、社会福祉等、地域社会発展のための様々な活動を行います。国際色豊かなメンバーで構成され、地元住人との交流を図ることで刺激され、新しい考え方や経験を得ることができます。また、ボランティアメンバーは通常3～13ヶ国から集まっていますので、少なからず誰もがカルチャーショックを経験し、メンバーと議論することもあります。困難なことがあってもそれを乗り越えることによって得られる達成感や自信は、実際に参加した人でないと味わえない醍醐味です。今年度は、国際教育交換協議会日本代表部と共に説明会を開催し、20名余りの塾生がトルコ、チェコ、フランス、ドイツ、アイスランド、メキシコ、韓国などでの活動に参加しました。

・「ボラ学」&「ふるサポ」夏ボランティア体験！」 横浜市港北区が、「住んでいて良かったな」、「ずっと住み続けたい」と思える“ふるさと”港北づくりのため、地域住民や行政との信頼関係を築きつつ、市民レベルで地域の課題解決や魅力ある街づくりを行っている事業が「港北区ふるさとサポート」です。今年度、港北区と「ボランティア学ってなに！」が協働することで、ボランティアを始めようとする塾生をサポートし、参加した塾生には社会参画体験を通じて、単なるボランティア体験に止まらず、関心を抱く研究テーマと結び付けること、交友関係を広げることなど、塾生の主体性、自主性や広い視野を育てます。6月に横浜市港北区区政推進課との共催で説明会を実施し、10名余りの塾生が様々な分野の団体に参加して活動しています。

・「夏！市民活動体験塾 2006」 ボランティア活動に参加してみたい。NPOって何だろう。市民団体って、どんな人たちで運営されているの。などの疑問に答え、夏休みにボランティア活動・市民活動をじっくり体験してみたいと考えている学生のための塾です。6月に横浜市市民活動支援センターと共に説明会を開催し、10名余りの塾生が様々な分野の団体に参加しています。



・「エコ・ボランティア in オーストラリア」 国籍の異なる人々と共同作業を体験し、寝食を共にすることで、環境保護の知識や視野を広げることができます。また、リーダーや参加メンバーとの異文化交流を通じて、実践的な英語力アップはもちろんのこと、様々な価値観を知ることができます。国際教育交換協議会日本代表部との共催で、6～12月にのべ8回の説明会を実施し、約5名の塾生が参加することになりました。

・「平成18年度横浜市協働事業提案制度モデル事業：青少年による家庭育児支援・地域ネットワーク事業：わくわく子育てサポート事業」 おやこの広場で出会った家庭を訪問して、その家で子どもと一緒に遊んだり、公園に出かけたり、買い物に一緒に行ったり・・・そんな小さなボランティア活動が、港北区の子育てを応援する力になる！NPO法人びーのびーとの共催で6月に2回の説明会を実施し、約5名の塾生が参加しました。

・「ノートテイク講座」 ノートテイクとは、聴覚障がい者のために、音声情報をリアルタイムで文字情報にするための要約筆記の一つの方法です。今年度は、社会福祉法人神奈川聴覚障害者総合福祉協会と共に、10～12月の火・金曜日の夜、全9回の講座を実施し、約40名の塾生、2名の教職員、約16名の地域の方が参加しました。

・「デック 上映会」 映画鑑賞を通し、タイ山岳部の少数民族の子どもたちがどのような状況において生活し・学んでいるのかを参加塾生が知ることにより、参加自らが学ぶことの意味を再確認するきっかけを作ることを目的として企画しました。

12月1日に学生総合センターの主催で実施し、約30名の塾生、教職員、地域の方が参加されました。当日はさらに現地において援助活動を行っているNPO法人「地球市民 ACT 神奈川」のスタッフに講演をしていただき、それを基に参加者を交えてボランティアを行うまでの様々な問題点等についてディスカッションを行いました。

以上のような活動を通して「ボランティア学ってなに！」を受講した塾生から「考え方を広げ成長した」、「新しい体験や感動を得た」などの声が届いたと共に、大学にボランティア活動の支援を望んでいることも分かりました。そしてこの事業を通して横浜市を始めとし、義塾を取り巻く多くの個人や団体・諸施設から、「知の源泉である大学としての社会貢献」、「社会に貢献できる人材の輩出」などが期待されていることも実感しました。この事業は、継続性をもたせていくことに意義があると考えています。今後も更なる充実・拡充を図って活動を続けたいと考えています。

PART II. 意見交換

以下の内容は、各グループの記録をもとに意見交換の内容を要約・整理したものです。グループ間で重複するご意見も多数ありましたので、それらについては適宜集約させていただきました。PART Iで活動報告を行った二つの活動に対するご意見が大半となりましたが、その多くは大学全体の社会貢献・地域連携のあり方を考える際にも有益であるように思います。(牛島利明)

【大学全体についての意見・要望】

- 日吉の象徴は慶應。どこに住んでいるかを知人に説明する際は「慶應があるところ」と説明する。
- 住民からみると、大学のキャンパスに入らないと学内で何をやっているのかわからないのが問題であると感じる。今日のタウンミーティングもたまたま通りかかったらやっていた。
- 大学の行事情報などは、キャンパス内だけでなく、駅コンコースや商店街側に掲示をするなどの努力をしてもよいのではないか。他大学は公共施設などにポスターを掲示したり、チラシを置いたりしているが、慶應のものは見かけない。何もしなくても人が集まるせいなのか、慶應は大名商売。

- 日吉には学生と住民、住民同士が交流できる公共施設が不足している。新しい複合施設の中に地域の交流スペースを作りたい。

●一口に日吉といってもその地域はとても広いが、地域で活動している団体・個人はそれぞれ個別で活動している。このため、他の人たちが何をしているか分からぬことが多い。もっと学生・住民お互いの顔がつながる場が欲しい。慶應にその中核としての役割を果たして欲しい。

●大学の中にもっと入って行きたい。地域住民が活動するための場が欲しい。

●大学の施設を開放して欲しい（食堂、野外カフェ、プールなど）

●学生にはもっと街に出てきて欲しい。今の学生は騒ぐときだけ日吉の街にやってくるようだ。とくに春の新歓期の騒ぎ方は大迷惑である。

●ヒヨシエイジのようにあいまいなものではなく。もっと具体的なものを掲げて募集したほうが人はあつまる。たとえば有名教員の講義など知的トレーニング場を解放することなど。

【ヒヨシエイジに関する意見】

（テーマ・コンセプト）

●テーマを明確に打ち出して、大きいコンセプトを出すと、地域の人も参加しやすい。

●ヒヨシエイジのアイデンティティやスローガンが弱い。アイデンティティがはっきりしないことで塾外・塾内の広報が浸透しにくい。



●毎年のスローガンの以外にも、継続的な活動をしていく上では、「ヒヨシエイジ〇か条」といったものを作成し、何年も維持して浸透させが必要なのではないか。

●ヒヨシエイジは商店街とだけ連携しているようにみられがちなので、住民全体を対象とする活動であることをアピールすべきではないか？



(実行委員会の運営方法)

●10年スパンの活動というのなら、まず学生メンバーをしっかりと集める努力をすべき。

●「町の活性化」と大上段に言うと学生が引いてしまうのでは。もっと遊び的な要素を取り入れることが必要。

●ヒヨシエイジは毎年実行委員会の学生を入れ替わるため、活動や地域との連携が深まっていかない。外部からみると、学生はきっちりとした組織を嫌がり、一年きりで辞めてしまうようなイメージがついている。下の学年を入れて引継ぎをきちんと行い、毎年活動を伝えていく欲しい。

●学生と社会人の割合は特にこだわらない。進級によって学生に入れ替わってしまうのなら、日吉に残る教職員や住民が支えていけばいいのではないか。

(地域との連携のあり方)

●活動の拠点・連絡窓口がないため外部の人間はコンタクトが取りにくい。窓口は実際には一本化されているのかもしれないが、外の人間からはコンタクトが取りにくい存在にみえる。この人に言えば確実に全員に伝わるようなシステムが欲しい。

●ヒヨシエイジの企画の段階から住民を参加させて欲しい。企画を完成させる前に地域住民に投げてみるべき。企画をお願いするのではなく、一緒に作り上げていくことが必要ではないか。

●大学・学生が一方的に住民の参加や協力を求めるのではなく、地域の活動やイベントに手伝いに行く、地区センターのお祭りに参加するような連携をとりあえることが望ましい。

●学生同士の連絡が緊密な分、外部の人が入りづらい。また、運営は学生という意識だから意見を出しにくい。協議会以外にも気軽に参加して議論できる場を設定すべき。

●ヒヨシエイジ協議会の話し合いには参加しづらい。人数が多すぎたり、商店街・町内会の役員が並んでいたりするため、それ以外の人は発言しにくい雰囲気である。もっと小さい場を設定し、お茶を飲みながら会話ができるような雰囲気の場を設定して欲しい。

●たとえば、月一程度で集まる会を開くなど、一年を通じて関われる場があったほうがよい。社会人の場合には、不定期でなく毎月決まった日程で行われる集会が望ましい。

●ヒヨシエイジのエイジフェスタ終了後にタウンミーティングのような場を作つて欲しい。

●住民の持っている糸（人間関係のつながり）と学生の持っている糸は違うため、それを上手く利用して活動すべき。アプローチする地区を広げ、各地区のキーパーソンと連携をとりあえれば情報が伝わりやすく、地域の人も参加しやすい。たとえば、正式な女将会、婦人会等の女性が中心のグループとつながりを持つなど。広報についても同様



開かれゆくキャンパス6「日吉キャンパスマタウンミーティング」

である。

●商店街に事務所を借りてはどうか。たとえば、早稲田稻毛では商店街の喫茶店を月一で借り、地域に開かれた誰でも参加できるような場所をつくっている。

●小学校との連携をより深めるべき。子供が参加すれば、必然的に親も参加することになる。

●住民との連携に際しては、日吉地区センターをもっとうまく使えばよい。100以上の地域サークルが利用している。

(地域での広報活動)

●ヒヨシエイジ全体、できれば大学全体の情報を統一して地域に情報を発信することが必要。散発的に発信しても目に留まらない。

●広報を見かけて興味を持ってもフィードバックする窓口がわからない。

●既存の地域メディア・マスコミ（商店街のメルマガ、タウンニュース、神奈川新聞など）を利用するのが効果的。

●広報の回数が少ないので塾内にも浸透しにくい。春だけではダメ。

(活動・イベントの企画内容)

●ヒヨシエイジには住民の参加型企画が少ない。具体的な企画として、エイジフェスタ中に銀杏並木でボランティア団体が出店やゲームなどをできたら住民が多数参加できて面白いのではないか。

●イルミネーションを工夫する、商店街の街灯と日吉の森の明暗を利用するなど、街と大学が一体になるようなイベントの工夫があってもよい。

●「日吉活性化クーポンピヨ」（地域でボランティア活動などをしている方々に、日吉商店街の協力店舗で使えるクーポン券を配布する試み）のような取り組みは今回が初めて。学生がこのような事を企画してくれることはうれしい。しかし、「ピヨ」と「天ぷら油リサイクル」（学生が天ぷら油を回収し、廃油を持参した人にピヨを配布する企画）も広報不足。たまたまフリマに行ったから、てんぷら油を回収していることを知ったようなもの。もっとマスコミを使って広報活動をしたらどうか。また、クーポンが使用できる店舗が少ない、かつ若者向けの店が多くあまり使えなかつた。南日吉商店街や下田商店街でも使用できる店舗が欲しかった。



【ボランティアについての意見】

(ボランティアに参加する学生を増やすには)

●学生がいきなりボランティアに飛び込むのは難しい。受け入れる側からの誘いが必要。自分が必要とされていると思えると、学生も行く気になれる。（学生の意見）

●乗馬が好きな人なら乗馬ボランティアには興味を持つことができる。実際に外国への興味が強い学生の間では、海外ボランティアは人気である。ボランティア経験がない学生にとっても興味がある分野なら入りやすい。そもそも、ボランティアとは、自分が楽しめるもの、自分が必要とされる場所であることが必要ではないか。（学生の意見）

●ボランティア団体とボランティア参加者の間に窓口を作って欲しい。「ボランティア学」のような試みをもっとしっかりと、継続的にできるシステム作りをして欲しい。いつでもボランティアをしたい人がどんなボランティア団体があり、どんな活動をしているかがわかるような紹介の仕組みを作って欲しい。

●活動の中では、子育てに关心のある学生はなんとか集まっているが、それ以外の多様な学生にも集まらせてもらいたい。ヒヨシエイジにも協力してもらえたと思う。（子育て支援団体関係者の意見）

(学生のボランティア活動の問題)

●ボランティア活動における責任の所在を明確にすること。その点について、ボランティア活動に参加する学生も、学生を受け入れる側も理解することが必要。

●ボランティアに参加したいという学生にも、熱意・やる気には差がある。学生がなぜそのボランティアをやってみようと考えたか、どの程度の回数・時間参加したいと思っているのかが分からぬ。学生と地域住民との関係はまだ始まったばかりだから、お互いわからないことだらけで、接触もしづらいし、要求もしづらい。このため、学生の熱

開かれゆくキャンパス6「日吉キャンパスタウンミーティング」

意を知るためにある程度の観察期間が必要である。時間をかけて学生の熱意を確認し、徐々にお互いの意識をすりあわせていく必要がある。

●住民と学生が普段から付き合い、焦らず時間をかけて意見交換を行っていくことで、微妙な距離のとり方をつかんだり、お互いの悩みなどを理解したりできると、よりよいボランティア活動になっていくのではないか。

●学生側もしっかりした意思表示が必要。ボランティアはもちろん強制ではないが、あいまいにしていつのまにかやめてしまうのは良くない。

●ボランティア学生を、地域の人が育てるという視点があってもいい。(最低限の規則を守らせる、やってはいけないことを教える)

(継続性の確保)

●ボランティアに参加する学生一人一人の継続性を高めることで、ボランティア人材不足を解消できる。継続的に活動する人が増えれば、さらなる発展を目指せる。

●学生がボランティア活動に参加する場合、学生と地域の人との活動可能な時間帯のずれがある。地域の人は平日の昼から夕方まで活動しているが、学生は授業などがあつて活動のすべてに参加できるわけではない。しかし、学生は時間割の合間などを活用して少しずつ行けばいい。ボランティアが単なる義務や負担にならないよう、楽しむことが大切。(学生の意見)

●時々しか参加してもらえないでも、活動の理念などが理解されていれば構わない。基本的な理念や規則などを、受け入れ側が学生に対してはっきり提示すると良い。

●ボランティアである以上、強制ではないが、間があいてしまうと行きづらくなる。強制力がない分、一度度関係が途切れてしまうと学生側からは再開しづらい。受け入れ側にどう思われているか分からないし、心配である。受け入れ側は、積極的に学生に対して誘いを掛けるべきである。



●受け入れ側から学生への積極的・継続的な情報発信が行われれば、ボランティアに参加しやすい。ただし、何度も個別に連絡が来ると、連絡をもらった学生にプレッシャーを与えてしまう。メーリングリストなどの利用が有効と思われる。MLなら、全員に無差別に行われる所以、受け入れ側からもアプローチがしやすい。MLに参加するかどうかで、学生の意思表示もできる。

●進級によってキャンパスが変わると、日吉には通いづらくなる。ボランティアメンバーをサークル化して、ローテーションを組むなど、分担をしながら、継続的しやすい仕組みを作ることができれば一人ひとりの負担も減る。

「日吉キャンパスタウンミーティング」

日時：2006年12月16日（土）

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス
来往舎シンポジウムスペース

司会：

牛島利明

（商学部助教授、教養研究センターコーディネーター）

発表者：

佐藤なつき

（ヒヨシエイジ2006実行委員会代表・商学部2年）

篠塚憲一

（ボランティア学ってなに！代表、
学生総合センター日吉支部課長代理）

タウンミーティングに参加して

佐藤なつき

（ヒヨシエイジ2006実行委員会代表）

当日は、予想をはるかに上回る盛況ぶりで、予定時刻をすぎても話が終わらないほど盛り上がりました。参加した皆さんからは、「これまで聞けなかったことが聞けてよかったです」「地域住民と学生は、意外と同じことを考えているみたいで驚きました」という意見を聞きました。やはり、お互いの思いを知り、さらに活動を深めていくためには、このように時間をとて話すことも必要なことだと感じました。いただいたご意見を、今後の活動に生かしていけたらと思います。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.14
交流・連携セクション（担当：中島陽子）

2007年3月30日発行

代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL：045-563-1111（代表）

lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>